霊能力者の夢

LivaTos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊能力者の夢

【Ｎコード】
Ｎ２２９８Ｕ

【作者名】
ＬｉｖａＴｏｓ

【あらすじ】
次々と起こる猟奇的殺人事件。それは不登校である並坂隆一には関係の無いことだった。しかし、
「相談があるんだけど」クラスメイトの倉橋沙綾の一言で、彼は事件に巻き込まれていく。果たして犯人は誰なのか？　彼女は何を隠しているのか？　事件と何の関係があるのか？　並坂にとって一生忘れられない日々が始まる。

異常快楽殺人者　その1

誰かにつけられている――そう感じるのには二つ根拠があった。一つは、現在時刻が午前二時頃だということだ。周囲は時が止まったように静かで漆黒に包まれており、尾行には申し分ない状況だと推測できる。もう一つは、最近この辺りで多発している殺人事件に対する警戒心である。発見された遺体はどれも女性で首無し、という猟奇的な事件で、神経質にならざるを得ないものだ。

ゆえに迂闊だった。

彼女はつい数十分前の自分の行動を恨んだ。居酒屋で酔いが回った彼女は、早く帰りたいと思い、後輩の制止を振り切り、支払いを終えた後しばらく歩いたのだ。後輩たちも酔っ払っていたため、彼らの腕を振り払うことは容易だった。間もなくタクシーを拾う予定だった。

しかし彼女はそこから記憶を失い、気がついたら現在の場所を千鳥足でふらふらと歩いていたのだ。恐らくアルコールのせいだろう。

あの時、直ぐタクシーを呼んでおけば、と彼女は思った。こんな思いはせずに済んだ。今頃自分の部屋でぐっすりと寝ていたはずなのだ。

だが、後悔したところで仕方が無い。彼女は不確かな足取りで家へと進む。暗闇に潜んでいるであろう殺人鬼に恐怖心を抱きながら。

心拍数がじわりじわりと上昇してくる。

体が小刻みに震え始める。

今にも泣き出しそうなほどの吐き気が襲ってくる。

住宅街を歩いているはずだが、まるで樹海をさまよっているような異常な感覚を味わっていた。
彼女は近くの住居に助けを求めようと思ったが、できなかった。本当は殺人犯に尾行などされていないのではないか、という思いが一方であったのだ。さらに現在地の風景はなんとなく見覚えがあるので、もう少し歩を進めば自宅が見えてくるはずだった。
（あと少し、あと少しだ……）
歪む視界の中で彼女は一縷の希望を見出し、抑えきれないほどの恐怖と戦いながら足を送り出す。
（早く眠りたい）
コンクリートの壁に手をついた。ひんやりとした感覚が手のひらに広がる。呼吸を整えて、再び歩き出す。
ジリッと音が聞こえた。砂利と砂利を擦りあわせたような音だった。それは確かに後方から響いてきた。
一気に酔いがさめた。大量の冷水をぶっかけられたようだった。
（やはり誰かがわたしをつけている。……殺人鬼？　いやだ、怖い怖い怖い怖い怖い！）
彼女は走り出していた。とはいえヒールを履いた足では満足に動かせない。ぎこちない走り方は今にも頓挫しそうだった。
同時に大きな足音が後ろから近づいてきた。その時、全てが確信に変わった。
彼女は荒い息遣いを繰り返しながら走った。ひとつの石ころで倒れそうな危うい体の均衡を保ち、必死に前進する。絶対に死にたくない、その思いが彼女に力を与えた。
住人に助けを求めるか、と考えたとき遠くの方に光が見えた。自動車のライトだった。どうやら車が行きかっているらしい。他にも色々な店が灯りをともしていた。
（あそこまで行けば、何とか助かる）
そこと対角線上に公園があった。月光に照らされた遊具たちが不気味な存在感を放っている。ここを通らねば安全地帯に行くことは

できない。
彼女は公園に足を踏み入れた。継続して走る。
突如として、地面がアスファルトから別のやわらかいものに変わった。彼女は見事にバランスを崩し、その場に倒れこんでしまった。痛くはなかった。手に砂が付いている。砂場に足を取られてしまったようだ。隣に滑り台があった。
彼女は一目散に振り返った。黒い影が立っていた。
「い、いや！　お願い！　殺さないで！」彼女の頬に涙が伝っていった。
「……」
「いやだ、いやだぁあ……、あっちいってよぉ……」
「……」
無言の影は近づいてくる。
彼女は、いや、いや、と言葉をこぼしながら震える体をその影から遠ざけようとしていた。だが次の瞬間、彼女は固まった。その影が包丁のようなものを出してきたからだ。暗闇の中で刃だけは視認することができた。
殺人鬼はそれを振り上げた。彼女の目が見開かれる。そして悲鳴をあげた。
刃は無情にも降りてきた。彼女の瑞々しい叫び声はやがて、ひどく渇いたものに変わっていった。赤黒い液体が飛び散り、滑り台に張り付いた。

間もなく彼女の首は、無くなった。

異常快楽殺人者　その2

昨日、空っぽだったパッケージの中にはＤＶＤが入っていた。並坂隆一は密かに喜んだ。一泊二日だから高確率で返却されているとは思っていたが、実際目の当たりにすると感無量だった。大袈裟だが――。

彼はパッケージからそのＤＶＤを取り出す。これをレンタルするために来たのだ。もたもたして敵に取られたりしたら、悔やんでも悔やみきれない。同名のパッケージはあと五つあったが、どれも貸し出し中になっていた。つまり、並坂の持っているもので最後だった。

（やれやれ、昨日も今日も平日だというのに暇な人が多いんだな）

そう思いながら、並坂は手に持っているＤＶＤを一瞥し、レジ近くのアナログ時計を見据えた。

時刻は午前九時きっかり。

学校は一時限目が始まっているころだろう。ふとそんなことが頭に浮かんだが、あまり深く考えないようにした。

それよりも、と並坂は思った。昨日ここに来たのは午前九時よりも前だったはずだ。

彼は再びＤＶＤに視線を落とす。

ということは必然的にこれが貸し出されたのは午前九時前ということになる。ならば今日、普通ならほとんどが返却されているわけだ。しかし現在、もうほとんどが貸し出し中になっている。要するに並坂よりも早い時間帯に借りにきた人物がいたということだ。

（ふん、ニートどもが）
十中八九、自宅警備員とやらを名乗る人物たちだろう。
だが、不登校である並坂に死角はなかった。
毎日同じ時間帯にこのレンタルビデオ店に来て、新作及び気になるアニメのチェックを欠かさず、見たいと思った作品を借りる。そして午後に見る。毎日だ。特に、今回借りようとしているものは二日も前から目をつけていたものだ。借りれないわけがない。
彼は、自分の後にこのＤＶＤ目当てで来店してくる者たちに、心の中で謝罪した。その一方で優越感に浸りながらレジに向かおうとした。
「おっす、不登校くん」
突然、目の前に右手を上げている女が現れた。
澄み切った汚れのない栗色の瞳が特徴的な、色白の小柄な少女だ。間違いなく美少女の類に含まれるだろう。綺麗で長い黒髪は撫でたくなる程の愛くるしさだった。
並坂はこの人物を知っていた。
「倉橋さん……？」クラスメイトの倉橋沙綾だ。
「おっ、名前覚えててくれたんだー、感激っス」
忘れるはずがない。学年で一、二を争う美貌を持つ少女の名を忘れるわけがない。
「不登校くんはこんなところで何をしてるんだい？」美少女が訊いて来た。
「えっ、ああ……」並坂は倉橋から視線をはずした。「ＤＶＤ借りに来たんだよ、うん」
「へぇ～、まぁ、大体予想はついてたけど」
「じゃ、訊くなよ……」
「え？」
「え？」
ハッとした。またあの癖が出てしまった、と思った。不登校になってから一度も出ていなかった忌々しい癖だ。

並坂は倉橋をチラッと見る。彼女は、にやけた顔をしていた。確実に並坂の癖に気づいているようだった。
「ふ～ん」倉橋はにやにやしながら、並坂の顔を覗き込んだ。「確認だよ、確認。もし万が一、万引きだったら大変でしょ、店内引き回しの末、さらし首にしないと」
「ペナルティ重過ぎるだろ！　どんだけ万引きに恨みがあるんだよ！」
「無いけどね」
「無かったよ！」言った瞬間、並坂は慌てて後退した。それから身振り手振りを使ってごまかそうとした。「い、いや、これは違うんだ……これは……」
「何が違うのかなぁー」倉橋は意地悪な笑みを浮かべて並坂に詰め寄った。お互いの、瞳と瞳の距離が数センチに狭まった。
（距離が近いっ！　近すぎるっ）
並坂は口をパクパク動かしながらも少し幸福だった。良いにおいが漂ってきた。
「顔、赤いよ」倉橋が小さく唇を動かした。囁くような声だった。
倉橋がさらに近づいてきた。並坂がその気になれば、キスができるほどの距離だ。頭の中をいくつもの煩悩が駆け巡った。
（ちょっ、なんでこんなことになってんだ？　どうしよう！　俺、もう……、倉橋さん……倉橋さん！）
彼の唇は倉橋の唇めがけて、動いた。しかし倉橋はそれを華麗に避け、並坂の右耳に唇をよせた。
「ツッコミ癖まだ治って無いんだね」
並坂は倉橋を押し飛ばした。
「な、治っとるわ！」顔を真っ赤にして彼は言った。「てか、近ぇよ！　勘違いするだろうが」
「ほら治ってない～」倉橋は並坂を指差す。「現役でツッコんでんじゃん。でも腕は落ちたかな～、『近いよ！』って早くツッコんで欲しかったのに」

「え？」
（近づいて来たのは、ボケ？）
軽く人間不信になった。並坂は視線を落とした。
「でもさー、誇るべき個性だと思うよ、私は」倉橋は腕を組み、うん、うん、と頷きながら言った。「確かに四月のころはびっくりしたけど、いきなり『ナカジマか！』って大声で言うんだもん。クラスが静まり返ったよ。てか、あれボケのほうは何だったの？」
そのボケなら覚えている。『おいイソノ、野球やろうぜ』だ。某国民的アニメの台詞で、反射的にツッコんでしまったのだ。それ以来すっかりクラスのツッコミキャラとして定着してしまった。地獄の日々の始まりである。四方八方から収拾不可能のボケが飛んできて、つまらない応対をすると責められ、心がぼろぼろになった。
不登校になった一因だと並坂は思っている。
「ねぇ、ボケは何だったの？」倉橋が訊く。
並坂は、答えたくない、と言った。
「あ、そう。じゃ、別にいいよ」
倉橋はそう言うと並坂に背を向けて、退去する意を示した。
並坂はモヤっとしたものを抱えたまま、彼女を見送ろうとした。が、できなかった。
「で、お前はここで何してんだよ！」盛大にツッコんだ。
しまった、と並坂が思うのと同時、倉橋が振り返った。満足そうな笑みを浮かべている。
「ツッコんだね。ツッコんでしまったね。うふふ、遅いよー、うふふ」
彼女は嬉しそうに歩み寄ってきた。
「不登校くんと同じだよ。ＤＶＤ借りに来たのー」
「来たのーじゃねぇよ！　俺が聞きたいのは何で学校行ってないのかってことだよ！」並坂の口は自動的に動いた。
「サボった」
「即答かよ！」

「うん、別に隠すことじゃないしね。後ろめたいことなど何も無いよ！」
「あれよぉお！　罪悪感とか感じろよぉ！　何で威張ってんだよ！」
「えー、不登校くんにそんなこと言われたくないよ」
「ぐっ……、言い返せない……ッ」
「まぁ、ふたりとも同類ということですかな」
「何だろう、このもやもやは？」
消化不良だったが、不登校である並坂に言い返す言葉など何もなかった。
「はぁー、もうどうでもいいや。じゃあね、倉橋さん」それだけ言って並坂は倉橋の隣を通過しようとした。彼女の後方にレジはあるからだ。それにもうツッコむのはうんざりだった。体力がもたない。
彼が今まさに倉橋を通り過ぎようとしたときだった。彼の腕を倉橋が掴んできた。それも強い力で。
「何だよ？」並坂は不機嫌気味に訊く。掴まれた部分が少し痛かったのだ。
「え？　　えへへー、カバディカバディ」彼女は前を見据えながら言った。
「いや意味分からんし、カバディなら他の人とやりなさい」
並坂はそう軽くツッコんで倉橋の腕を振り払った。彼女の腕はだらんと宙を舞って、正位置に戻った。
彼は再び歩き出そうとした。すると、待って、と倉橋が小さく呟くのが聞こえた。並坂は彼女の顔を見た。彼女も並坂を見つめてきた。
「ごめん、ウソ」
「はあ？」並坂は首を傾げた。
「だから」倉橋は眉間に皺を寄せ、視線を下に向けた。「さっきのカバディはウソ、ちょっとふざけただけ、というか今までのやり取りもふざけてただけ……、本当に言いたかったのは……？」
「何、言ってんの？」

（何故急にシリアスモード？　今までのやり取りはふざけていたって、言わなくても分かるけど）
「えっと……」倉橋がもじもじし始めた。「本当は――」
「あ、ちょっと待って」並坂の胸中に期待が広がっていった。心拍数が上がっていく。
（まさか、とは思うが……）
彼はウキウキした。これはアレだと思った。
「ど、どうぞ」にやけた顔で促した。
「うん、あのね」倉橋が話し始めた。「最近、この辺りで殺人事件が多発してるでしょ」
「え？」
「え？」
「あ、いや、続けて、続けて」並坂は落胆した。
「そのことと関係があることでちょっと……」
「うん」
「相談があるんだけど」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2298u/

霊能力者の夢

2011年6月22日09時34分発行